

# 定家監督書写本私家集の諸相

―江師集・成尋阿闍梨母集・殷富門院大輔集・傳大納言母上集・四条宮下野集・相模集―

日本文学／講師 岸本 理恵

## 一、はじめに

私家集の伝本は家集ごとに現存の状況や伝来が異なり複雑なものがある。しかし、近年各図書館などに所蔵される古写本が複製本として公開され、『冷泉家時雨亭叢書』が刊行されたことによって、私家集の伝本研究、特に鎌倉期の写本や古筆切についての調査・研究は大きく伸展した。これを受け、二〇〇八年にCD・ROM版として発行された『新編私家集大成』（古典ライブラリー）では、旧版の『私家集大成』で江戸期の写本を底本としていた複数の家集について、その祖本であることが明らかになった鎌倉期のものに入れ替える等の措置がとられた。

平安・鎌倉期の歌人たちの私家集が、何百年も経た江戸期の写本ではなく鎌倉期の写本で読めるようになったことは意義深い。しかし、短期間に多数の資料が公開される中で、家集の性格・特徴についての紹介や考察は、書誌的な記述、系統分類をするといった各家集の範囲に留まるものが多い。冷泉家時雨亭文庫に今なお多く伝えられ、一部は他家に蔵される定家に関わる写本について、定家の書写工房とも呼ばれる場における一連の精力的な書写活動のなかで書写されていることは既に明らかとなっている。そして、これら定家監督書写本には共通する特徴や傾向があることもまた知られている。にもかかわらず、各家集の解題や解説はそれぞれの家集についての考察の範囲に留まり、これらの写本を総合的に扱う

研究はいまだ十分に行われていたとは言えない。

特に、『冷泉家時雨亭叢書』の刊行以前に複製本として公開されていた資料については、刊行当時において比較対象が少なかったために明らかとなっていないことが多く、冷泉家蔵本の研究を反映させた考察が現在も加えられないままとなっているものがほとんどである。また、『冷泉家時雨亭叢書』に収められるものであっても、定家監督書写本という概念ができつつある中で次々と公開、解題が付されていったものである。定家の書写本についての定義は『冷泉家時雨亭叢書』のうち『平安私家集四』解題において明記されているが、各家集の解題では定家書写本としながらも、その基準とされる箇所は「定家と推定される」部分が一行、あるいは数文字あるという、明確ではない場合も少なくある。

こうした状況を踏まえ、稿者は冷泉家時雨亭文庫蔵『有房中将集 定家本』の同筆資料について考察を加える中で、この家集を推定に依らずとも定家の写本と認めることを確認するとともに、定家の書写本についての定義に新たなものを加えた。<sup>2</sup> 本稿では『有房中将集』以外にも、これまでそうした定家とする基準や同筆資料について言及の少ない家集について同筆関係を確認できたのでここに紹介し、家集と家集を結びつけ、定家の書写工房における書写活動や定家の書写本成立過程についてその一端を明らかにしたい。

## 二、江帥集と成尋阿闍梨母集

冷泉家時雨亭文庫に所蔵される『江帥集』は大江匡房の家集。その書誌を『冷泉家時雨亭叢書』<sup>3</sup>によつて載せると次のようである。

綴葉装一帖。大きさは縦一六・八センチ、横一四・八センチ。表紙は前後ともに薄茶で四菱繋ぎ文。本文の料紙には、処々に墨流しを用いる。墨付八六丁。表紙中央に「江帥集匡房卿」と打ち付け書きにする外題は定家の真筆。本文は一オのみが定家の筆で、一ウ以下は側近の手に成るもの。処々に見られる訂正書き入りの一部も定家筆であらう。

大きさについて、『冷泉家の秘籍』<sup>4</sup>解説によれば、縦一六・八センチ、横一五・二センチとある。解題に側近筆部分の同筆資料についての言及はない。本文冒頭を定家が書いているので、疑いない定家監督書写本である。

次に、この『江帥集』と大阪青山歴史文学博物館蔵『成尋阿闍梨母集』を比較したい。『貴重典籍叢刊』<sup>5</sup>の複製に付された解題によりその書誌を次に示す。

列帖装一帖<sup>6</sup>。大きさは縦一六・八センチ、横一五・二センチ。表紙は白地に金茶による菱形を刷る。本文料紙には一部墨流しが認められる。墨付六六丁。表紙中央に「成尋阿闍梨母集」と打ち付け書きした書名は定家の筆。集付にも定家のものがあるので、これらによつてこの伝本が定家の没する以前の書写であること、定家が手沢本としていたことが知られる。

解題には本文筆跡についての言及はないが、複製本で確認する限り、定家側近による全丁一筆と見てよい<sup>7</sup>。外題に「成尋阿闍梨母集」とあり和歌集としているが、和歌を他より二字下げて書くのは一般的な和歌集と異なる。

さて、この二つの集を比較すると共通点が多い。まず、大きさが全く同じであり、ともに料紙の一部に墨流しが使用される。表紙の料紙も、解題によつて多少表現は異なるが同じものであり、中央に外題を打ち付け書きにして、ともに定家と認められている。

さらに、この二集の側近筆の部分（これを以下にA筆と呼ぶ）の筆跡は同筆と見られるものである。その特徴的な文字を本稿末にまとめて挙げた【図1】（【図

4】に示した。【図1】「た（堂）」は、後に示す『傳大納言母上集』（B筆）や『四条宮下野集』（C筆）のものと比べると、漢字（堂）の形をより多く残し、中央の横画がほぼ水平になっている特徴がある。【図2】「の（乃）」は、上の横画が少し窪みがちで、左斜め下に伸びる画は上に撥ね、最終画にあたる右下の丸みはやや短めとなることがある。【図4】にはこの二集A筆の「心」を他の集との違いが明らかにわかるように、『殷富門院大輔集』『相模集』のものと並べて示した。『江帥集』と『成尋阿闍梨母集』のA筆は三角形に近い形をしているのに対し、他は扁平である。

よつて、『江帥集』と『成尋阿闍梨母集』はそれぞれの解題において言及はないが、写本の形や料紙、本文の筆跡においても共通する点を多く持ち、ともに定家監督書写本の中でも非常に関係が深いものであると言える。

## 三、傳大納言母上集と殷富門院大輔集

次に、冷泉家時雨亭文庫に蔵される『傳大納言母上集』と『殷富門院大輔集』を比べて見たい。傳大納言母上つまり藤原道綱母は、『蜻蛉日記』の作者としても著名な人物である。その家集『傳大納言母上集』<sup>8</sup>の書誌は、綴葉装一帖。大きさは縦一五・八センチ、横一五・四センチ。表紙は前・後とも墨流し文の斐紙。本文墨付は八丁。表紙中央からやや左寄りに「傳大納言母上集」と打ち付け書きにする外題の筆跡は定家風で「定家の側近が定家の書風を模して記した」と推測される。本文の筆跡は定家近辺の者。

この解題において定家筆の箇所についての指摘はないが、本文の筆跡を「定家近辺の者の所為」としている。また『傳大納言母上集』を『冷泉家時雨亭叢書』において、平安歌人の家集の中でも定家監督書写本を集めた『平安私家集四』に収録することから、定家監督書写本として扱われていることがわかる。『冷泉家の秘籍』<sup>9</sup>解説では、外題は定家の側近、本文も終始側近の筆としながらも、「定家の補筆かと推測される所もあり、これも定家監督書写本として差し支えなからう」とされており、やはり定家関連の写本群の中に配されている。

『殷富門院大輔集』は同じく冷泉家時雨亭文庫に蔵される。殷富門院大輔は、後白河法皇女亮子内親王（殷富門院）に出仕し、正治二年（一二〇〇）頃に没したとされる。その書誌は『冷泉家時雨亭叢書』の解題によると次のようである。<sup>10</sup>

綴葉装一帖。大きさは、縦一六・一センチ、横一四・八センチ。表紙は本文共紙、中央に打ち付け書きで「殷富門院大輔集」とある。この筆跡について「定家筆と見られている」としながらも、「時雨亭文庫の蔵本は、綴葉装や粘葉装の共紙に薄い表紙を貼り重ねたものが多いが、この集にはそれがなく、貼付けた表紙が早く失われたのではないか、とも思われる」とされるが、まず定家の筆跡と見てよいと結論づけられている。また、『冷泉家の秘籍』解説では「本文のどこどころには定家の所為かと思われる訂正が見られる」ともある。<sup>11</sup>

外題や書き入れが定家筆であるということは、定家監督書写本として認定するということになる。しかし定家監督書写本の中には外題を定家とは認めがたいものが見られる場合があるように、この『殷富門院大輔集』の外題は定家の筆跡に似せたものである可能性があるように見える。さらに、表紙は一般的に傷みやすく付け替えられる可能性がある。先に引いた『冷泉家時雨亭叢書』解題で指摘があるように、該本の状態がその可能性を示しているのであるから、本来は定家筆の外題が付されていたとしても、傷むなどしたために定家に似せたものを付け替えた可能性は十分にあるだろう。『冷泉家の秘籍』が定家の所為とする本文の書き入れについても、該本は重ね書きによる訂正は多いが、その多くは明らかに本文と同筆であるか、例えば「つ」を「へ」に訂正するような一文字単位のもので、定家か否かの判断が難しい。

また、本文の筆跡について、一才を為家とする近代の包紙が該本にはある。『冷泉家の秘籍』解説では、一才の筆跡について「為家の筆跡に通うところがある」として該本を為家本の中に配している。しかし、一才のわずか七行から為家と判断することは困難である。一ウ以下との筆跡の違いも、『冷泉家時雨亭叢書』解題では「別筆の可能性」という程度に留めているように、定家監督書写本によくあるような、冒頭を定家が書写し以下を側近が書き継ぐような明らかな違いというものではない。

つまり、『殷富門院大輔集』は、外題や書き入れにおいては定家監督書写本のような特徴をもつとされながらも明確に判断できる材料に乏しい。本文冒頭の筆跡を包紙に従い為家と認めて為家監督本として扱うのは、書き入れを定家と判断することは矛盾が生じるが、為家の筆跡と明らかに認定できるわけでもなく、判断が難しいものがある。

このように、『傳大納言母上集』『殷富門院大輔集』ともに、その書写された状況が判断しづらい写本であるが、『傳大納言母上集』の本文の筆跡と『殷富門院大輔集』の少なくとも一ウ以下の筆跡は同じと見てよいようである。その筆跡を【図5】～【図7】に示した。これを以下にB筆とする。

【図5】の「た（堂）」は、先に見たA筆【図1】と異なり、中央の横画が左下に大きく下がるのが特徴的である。また、「堂」の最終画にあたる「土」の部分小さくつぶれて丸くなっている。【図6】の「乃」は、上部の横画が水平に細く入り、A筆【図2】や後に述べるC筆よりも長く伸びている。【図7】の「能」は、左側の入り方が漢字の画の面影をA・C筆よりは残し、また垂直に近い角度となっている。

つまり、『傳大納言母上集』と『殷富門院大輔集』は、本文の筆跡が同じであることが確認できた以上、同じ場で書写されたものと考えることができる。現在は一方が定家監督書写本として、もう一方が為家本として、それぞれの写本群の間では孤立した本のように見られているが、同じ扱いをしなければならないということである。そして、この二本の示す特徴は、今までの定家監督書写本や為家監督書写本の定義には十分にあてはまるものではなく、その定義を修正する糸口を示しているといえよう。

#### 四、相模集と四条宮下野集

浅野家蔵『相模集』は、早く昭和一八年に影印本が刊行され、定家による書写奥書とともにその姿が世に知られてきた。橋本進吉氏の解説によりその書誌を以下に示す。<sup>12</sup>

胡蝶装一帖。大きさは縦五寸四分、横五寸二分。全八四丁。藍色金欄の表紙は後から加えられたもので、内側に原表紙がある。原表紙は丸に萩唐草の唐紙を用い、中央に「相模集」と定家の筆跡にて墨書。本文の筆跡は、定家とは明らかに別筆で、「恐らくは女性の筆にして、あるいは明月記の古典筆写の記事に屡見ゆる『家の少女』の手に成れるものならんか」とされる。

奥には定家による書写奥書が、

家本承久三年失之以大宮三位本令書留

嘉祿三年五月二十日

とある。この奥書により、本文は全丁側近筆ながら定家監督書写本と認定される。表紙の料紙も、冷泉家時雨亭文庫に蔵される『仲文集』や『伊勢大輔集』などと同じで定家監督書写本に複数見られるものである。本文に訂正の筆は多く、文字の上から太く大きな字で書き入れるものなどは定家の所為かと思われるものもあるが、一文字単位の訂正であるため断定は難しい。

次に、冷泉家時雨亭文庫蔵『四条宮下野集』について。その書誌を『冷泉家時雨亭叢書』により示すと次のようである。<sup>13)</sup>

綴葉装一帖。大きさは縦一七センチ、横一四三センチ。表紙は縹色で花櫨文様を刷り出した彩箋。本文墨付は一三二丁。片面書写を原則とするが途中には両面書写が二カ所、表裏とも白紙となっている丁が一カ所ある。また、途中には二丁分の切り取りがあるが、その前後に本文の脱落はない。外題は表紙中央に、定家筆で「<sup>14)</sup>宇治四条宮下野」と打ち付け書き。本文は終始側近の筆。

『相模集』と『四条宮下野集』は別々の所に蔵されていたためか、数ある定家周辺で書写された私家集の中からあえてこの二集を取り立てて比較されることはなかった。しかし、全丁側近筆によるこの二集の本文を比べてみると同筆と認めて良いものである。さらに、全丁分の公開がなく一部のみしか判断できないが、『入道大納言資賢集』についても同筆または類筆として良いのではないかと考えている。これらの筆跡を【図8】～【図10】に示した。これを以下にC筆とする。

【図8】「た(堂)」は、先に見た『江帥集』等のA筆と比べて細くて傾いているという点は『傳大納言母上集』等のB筆に近いが、C筆では最終画「堂」の「土」

の部分)がB筆よりも縦に細長いのが特徴である。【図9】「の(乃)」は、上の横画の入りが撥ね、左下に伸びる一画目は上に撥ね上がらないのが特徴である。

『相模集』には定家の奥書に「嘉祿三年」とあるので、『四条宮下野集』もこれに近い時期の書写と考えられる。私家集の書写年次は明らかでないものが多いが、このC筆については『相模集』によってある程度の絞り込みができる。この嘉祿三年(一二二八)は定家六六歳に当たる。書写奥書を持つ定家監督本私家集は少ないながら、他に『秋篠月清集』には安貞二年(一二二九)、『発心和歌集』にも安貞二年の定家による奥書があり、定家の私家集書写活動が盛んに行われた時期と重なるものである。

『入道大納言資賢集』についても同筆とすれば、これも嘉祿三年から遠くない時期、つまり定家晩年の書写と見るべきであろう。『入道大納言資賢集』には定家による寿永元年(一一八二)八月の奥書があり、一説には定家の若書きとされる。<sup>15)</sup>しかし、源資賢は寿永元年三月に出家、文治四年(一一八八)七六歳で没している。寿永元年八月は出家後五ヶ月という時期、没するまではまだ約六年ある状況で、定家が資賢の家集を書写したというのにも不自然な感がある。また、この集の性格や成立事情については諸説あるが、寿永百首とする説もある。<sup>16)</sup>しかも、定家の若書がいかなるものかは知ることができないが、公開されている約二丁分を見ると、定家の若書の中に定家の特徴的な部分が見えるというよりも、詞書に定家筆の部分がおり、歌は側近と見るべきものである。<sup>17)</sup>奥書や詞書の一部等を定家が書写し、他を側近が書くというあり方は、『金槐和歌集』や安貞二年の書写奥書をもつ『秋篠月清集』<sup>18)</sup>などに見られるものである。とすれば、『入道大納言資賢集』も定家の晩年に近い頃に側近を動員して書写したものということになるであろう。



## 五、まとめ

定家の私家集書写のあり方は、写本個別に解題が書かれることによって既に解明されたように思われているところがある。しかし、多くは冷泉家時雨亭文庫に蔵される平安歌人の家集という範囲において考えられたものである。既に公開さ



【図1】<sup>19</sup>  
A筆「た（堂）」

	
江43オ5 江44オ7 江44ウ3	成1ウ9 成6ウ11 成3ウ6

【図2】  
A筆「の（乃）」

	
江42ウ5 江43オ5 江44オ7	成1ウ5 成45ウ6 成1オ4

【図3】  
A筆「の（能）」

	
江82ウ7 江83オ10 江72オ6	成35オ2 成35ウ1 成48ウ5



【図4】  
A筆・B筆・C筆「心」

	
江22ウ2 江76オ9 成5オ8 成5ウ4	(B) 殷3オ2 (C) 相13ウ7



【図5】  
B筆「た（堂）」

	
傅8ウ5 傅4ウ10 傅5オ4	殷8ウ2 殷2ウ3 殷4オ5

【図6】  
B筆「の（乃）」

	
傅1オ1 傅2ウ8 傅2ウ8	殷2オ1 殷9ウ1 殷2ウ2

【図7】  
B筆「の（能）」

	
傅1オ9 傅1ウ7 傅2オ2	殷1ウ7 殷2オ2 殷6ウ9


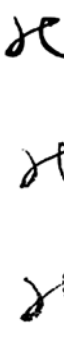

【図8】  
C筆「た（堂）」

		
下1オ8 下2ウ10 下17オ6	相4ウ1 相13ウ12	資C5 資C7 資D4

【図9】  
C筆「の（乃）」

		
下2ウ7 下8ウ8 下97ウ5	相7オ5 相12ウ1 相13ウ1	資A1 資A2 資A5

【図10】  
C筆「の（能）」

		
下41オ8 下1オ8 下2ウ3	相11ウ4 相45ウ1 相64オ1	資A1 資C1 資C9

れ解題なども付されている定家関連の私家集について、以上見てきたように比較してみると、家集ごとにこれまで知られていなかったつながりが確認できた。

早くに冷泉家から出て他家の所蔵となっている家集や中世歌人の家集に範囲を拡大し、個別の写本の内容を越えて、どのような書写がなされたのかについての考察は多くない。現在の所蔵者や歌人の生没年の枠を外し、定家が書写に関与したことが認められる家集すべてを総合して、巨視的に比較することがこれから必要である。そうすることで、定家の書写工房の様子やそこで作られた写本の特徴が新たに現れてくるものであり、個別の写本の性格もより明らかとなるはずである。本稿はそのための一段階とすべく、わずか六集ではあるが比較・考察を試みたものである。

(注)

- (1) 冷泉家時雨亭叢書第一七巻『平安私家集四』（朝日新聞社・一九九六年）片桐洋一氏の解題で定家の書写本を次のように定義される。
  - 1 全丁を定家自身が書写したもの
  - 2 一部を定家みずからが書写し、残りを周辺の人に書写させて校閲したもの
  - 3 全体を周辺の人に書写させたのちに校閲加筆したもの
- (2) 拙稿『藤原定家の書写活動と『有房中将集』』（尾道大学芸術文化学部紀要）一一・二〇二二年三月
- (3) 冷泉家時雨亭叢書第一八巻『平安私家集五』（朝日新聞社・一九九七年）、解題は田中登氏。
- (4) 『冷泉家の秘籍』（朝日新聞社・二〇〇二年）解説六七頁。
- (5) 貴重典籍叢刊別巻一『大阪青山短期大学蔵 重文 成尋阿闍梨母集』（角川書店・一九八七年）、解題は塩川利員氏、伊井春樹氏。
- (6) 『成尋阿闍梨母集』解題に「列帖装」とあるのでこれに従い、『江帥集』に引用した「綴葉装」と用語の統一を図らなかった。その他書誌の記述について用語や表現は、以降もなるべく各集の解題等にある用語を使用している。
- (7) 集の前半は一面あたり一〇行程度であるのに対し、後半は一四行を書写する部分があ

り少し印象は異なるが、同筆である。

- (8) 冷泉家時雨亭叢書第一七巻『平安私家集四』（朝日新聞社・一九九六年）解題（田中登氏）による。

- (9) 『冷泉家の秘籍』（朝日新聞社・二〇〇二年）解説七八頁。

- (10) 冷泉家時雨亭叢書第二六巻『中世私家集一』（朝日新聞社・一九九五年）、解題は井上宗雄氏。

- (11) 『冷泉家の秘籍』（朝日新聞社・二〇〇二年）解説一一一頁。為家本として掲載されている。

- (12) 古典保存会複製本。書誌は解説にあるとおり示したが、胡蝶装は綴葉装のことであろう。大きさはセンチメートルに換算すると縦一六・四センチ横一五・八センチとなる。

- (13) 冷泉家時雨亭叢書第一九巻『平安私家集六』（朝日新聞社・一九九九年）解題は田中登氏。
- (14) 五島美術館展覧会図録『定家様』（五島美術館・一九八七年）

- (15) 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院・一九七八年）第六章「寿永百首家集をめぐる」に詳しい。

- (16) これについて田中登氏のご教示を頂いた。
- (17) 岩波書店による複製がある。『金槐和哥集』（岩波書店・一九三〇年）

- (18) 天理図書館善本叢書と書之部第三六巻『秋篠月清集』（八木書店・一九七七年）

- (19) 【図1】～【図10】の下の漢字は左記に示した家集の略号、続きの数字等は丁数・丁の表裏・行数を示す。ただし『入道大納言資賢集』は注（14）の図版により右上の丁からABCDとして丁数に替えた。

江：江帥集 成：成尋阿闍梨母集 傳：傳大納言母上集 殷：殷富門院大輔集  
下：四条宮下野集 相：相模集 資：入道大納言資賢集